

雪崩から生還、GⅡ、ブロード・ピーク 登頂で8000メートル峰11座に 登頂した竹内洋岳

柏 澄子

GⅡの大規模雪崩から生還し、今夏、GⅡとブロード・ピークに登頂した竹内洋岳さん。マナスル東稜から始まった8000メートル峰登山の多くが無酸素登頂で、近年は外国人と組んで小規模隊で登ることが多かった。

わかりやすいキャッチフレーズをつけるとしたら「8000メートル峰14座にもっとも近い日本人」竹内洋岳ひろたか（37歳、元日本山岳会会員）。昨夏、彼はガッシュブルムⅡ峰（GⅡ）で大規模な雪崩に遭遇し、重症を負った。帰国直後、入院先で顔を合わせたとき、あまりの痩せた姿とその力のなさに、最初は驚いた。竹内はもともと細身である

が、細さのなかに力強い雰囲気をもった人であったからだ。それだけに、彼の姿を見て、改めて雪崩の規模の大きさと、そこから生還できたことがどんなに貴重だったか思い知った。

しかし一方で、彼はそのときすでに「来年、GⅡからやりなおします」とも話していた。どんな重症であっても、竹内には希望があっ

た。なぜならば、彼はすでに死のどん底から這い上がり、最悪の事態を脱し、生き延びてきたからだ。

奇跡の救出、命のリレー

竹内が雪崩に遭ったのは、GⅡのC2上部である。2007年7月18日、仲間3人とともに、ルート工作に当たっていた。そのときに、大規模な雪崩が発生した。

惨事を目撃した別の隊の登山者によると、竹内たちが登っていたまさにその場所から雪面が崩壊するのが見え、そしてそれは爆音となって響き渡ったという。山肌から雪面全体が剥がれ落ちるような大崩壊が起きたのだ。やがて雪崩が収まったあと、竹内は彼らに救助された。彼はおよそ300メートル転落していた。鼻で荒く呼吸し、苦

痛のために絶叫していたという。

医師であるスイス人登山者が、竹内ら3人にモルヒネを与え、ドイツ人登山者はC2から酸素ボンベを荷揚げし、吸わせた。C2までの距離は長くはなかったけれど、急峻で曲がりくねった細い雪稜だったため、彼らを搬送するのは困難を極めた。その間、ひとりの男性は、息を引き取った。もうひとりの男性は、介添えをすれば自分の足で歩けるほどだった。別のひとりの方は行方不明になっていた。

ヘリコプター救助を依頼したが、飛来したものの竹内たちを収容することはできなかった。竹内は、周囲に看病されながら、標高6500メートルのC2で一夜を明かさなければならなかった。それは彼が死に近づくことを意味していた。

シユラフやダウンジャケットで保温し、鎮痛剤を投与し、たった1本しかない酸素ボンベから酸素を吸入した。ときおり竹内はあまりの痛みに叫び声を上げ、酸素マスクを引き離そうとしたが、そのたびに周囲は、マスクを彼の口元に戻したほどだ。

呼吸が止まることもあった。すぐさま心肺蘇生をすると、息を吹き返す。上半身を起こし、浅く早い呼吸を繰り返しながら、やがて呼吸数は加速度的に増加し、そしてまた突然呼吸が止まる。こんなことが何度も繰り返された。竹内本人にとっても、また周囲にとっても「拷問」のような一夜だった。夜が明けても、耐え難いほど辛い時間はなおも続いた。C2にいても埒が明かないと判断した登山者たちは、竹内をC1まで搬送した。別の商業公募隊のガイドや日本隊のシェルパは、酸素ボンベをC1まで荷揚げした。

結局、竹内がヘリコプターに無事収容されたのは、事故の翌々日、20日のことだった。スカルドに向かつて飛び立つヘリコプターに乗った竹内が、親指を立てた拳を高く上げて振ったのを、C1から見

送った彼らは、しつかりと見ていた。2日にわたって生死をさまよった彼が、最後の力を振り絞って、みんなに感謝の意を表わしたので。その後、スカルドの病院からイストラバードに飛行できたのが25日。日本帰国は30日だった。

山の中で、全力で救助と看病に当たってくれた登山者たち、スカルドに駆けつけた日本の友人、イストラバードでサポートしてくれた医師や旅行会社、日本の留守本部や待機した何人もの医師たちなど多くの人に恵まれて、竹内は生還した。竹内本人の言葉を借りれば、彼ら全員が、まさに「命を手渡しでリレー」をしてくれたのだ。

半年後の雪山

日本で診断した結果、竹内のケガは、肋骨5本の骨折と腰椎3番の破裂骨折だった。手術をし、約1カ月間入院をした。

その後、着々と復帰していった。11月にはイストラバードに渡り、世話になった関係者たちに元気な姿を見せた。

「事故後半年以内には山を登ることに決めていた。登山ができることを、周囲にも自分自身にも示し



7月8日、昨年の雪辱を果たしGⅡ頂上に立つ竹内(右)

たかった」と話していた通り、翌年1月には八ヶ岳・赤岳主稜を登った。サポートしたのは山岳ガイドの花谷泰広だった。荷物は持たなかったというが、最終ピッチは、ロープのトップに立ち、登頂した。痛みもなく、順調な登山だった。

八ヶ岳のあと、山に行くことはなかった。翌夏のGⅡまで「体力温存」に入ったのだという。もともと最近では毎年のようにヒマラヤで過酷な登山を繰り返していたため、日本ではハードな登山やトレニングをするよりも、疲労回復、休養などのコンディショニングに努めている。こんなに短期間で山に戻れる体作りをしたことについて、竹内はあまり多くを語らない。

本当に地道にリハビリを続けたのではないだろうか。

魂をおいてきたあの場所から

8000峰14座は、雪崩に遭ったあの場所から、1年後に再開する。竹内ははじめからそう決めていた。それは、途中で帰ってきたその頂にまずは立ちたい、多くの人に助けられたGⅡに戻りたいという思いからであったが、「自分の足で下りていけないことが気持ち悪い」とも話す。自分の心も体も、まだGⅡのあの場所に置き去りにしたままのような感覚になることがあるという。

しかし、それはそんなに簡単なことではなかった。果たしてBCまでたどり着けるのかすら、竹内本人にもわからなかった。

しかし駒を進めるうちに心配事はひとつひとつ消えていった。悪路として名高いカラコルムハイウェイの、丸2日間に及ぶドライブにも耐えることができた。そして1週間かけてバルトロ氷河のキャラパンを歩きとおし、BCにたどり着いた。目の前のことをひとつひとつこなしていくうちに、山が見えてきて、頂が近づいてきた。



7月31日、ブロード・ピーク頂上直下を登る竹内

登山活動は連日の降雪に見舞われ容易ではなかった。しかし、01年のナンガ・パルバット以来の仲間であるベイカー・グスファツソン、平出和也と一緒に7月8日、頂上に立った。山頂は無風快晴だったが、ほどなくブリザードに変わった。

GII登山を終えたあと、竹内たちはブロード・ピークに向かった。このように高所登山を継続することを、竹内は「HAM」(High Altitude Marathon)と呼んでいる。これまでも竹内は、チョモランマからK2へ、アンナプルナからガッシャブルムI峰へとHAMを成功させたことがある。またほかのほとんどの年もHAMを試みてい

る(表参照)。高所に順応した体を活かして、次の山も登ろうという考えだ。無論そこには疲労回復とのバランスが必要だが、自国に戻って出直すよりもパワーと時間、費用を節約できるので効率がよい。3人がブロード・ピークに登頂したのは、7月31日。これで、ベイカーと頂上を分かちあったのは4度目となった。

GIIとブロード・ピーク、この2座のノーマルルートからの登山について、特筆することはない。しかし、竹内としては、雪崩事故と大ケガを乗り越えて手にした特別の頂上となった。

14座がすべてではない

竹内には、「14座の数字」を追っているような印象はない。彼ははっきりと「14座は私の登山のなかの一部であって、ましてや私の人生を考えると、もちろんそれはすべてではなく、ごく一部」と言う。今回同行した平出が「こんなにも大勢のヨーロッパ人が14座を目指していることに驚いた。14のピークだけでなく、それを取り巻く環境すべてを楽しんでいるように見える」と語った。竹内も同様だ。

最初は、ヒマラヤの大きな氷雪嶺にただただ憧れていた。登り続けるうちに、ヒマラヤの高峰がどんなに魅力的なものか知った。「フィートの単位で見れば違う区切り方になるのだから、14座はきわめて偶然のもの。しかしそれらはみな魅力的な山である。山容は大きくすばらしい。登ってみると個性的でおもしろい。登山史も興味深く、それも山の魅力である」と話す。8000^{メトリ}峰を登るうちに自然と14座が見えてきた。

竹内の強みは、大規模登山隊と、近年彼がともにしている友人同士の小さな隊の両方を経験していることだ。アルパインスタイルが至上とは思っていない。そのときのルートとメンバーにいちばん合った方法で登るのがよいと考えている。

日本だけでなく、外国の友人にも恵まれた。各国の登山の歴史、文化も知ることができ、登山の幅が広がった。とくに転機となったナンガ・パルバットで知り合った国際

| 年月 | 山名 | 結果 | 隊名/主なメンバー |
|-----------|------------|--|-----------------|
| 1991.9~10 | シシャバンマ | 登山 | 大字山岳部隊 |
| 1995.5.22 | マカルー | 登頂(東稜下部初登攀) | 日本山岳会隊 |
| 1996.5.17 | チョモランマ | 登頂(北稜) | 大字山岳部隊 |
| 1996.8.14 | K2 | 登頂(南南東リブ) | 日本山岳会青年部隊 |
| 2001.6.30 | ナンガ・パルバット | 登頂(ディアミールフェイス キンスフォォアルト、無酸素) | 国際公募隊 |
| 2003.4~5 | カンチェンジュンガ | 北面、7500m地点まで | ラルフ、ガリダ、ベイカーら5名 |
| 2004.4~5 | シシャバンマ | 南西壁6500m地点まで | ラルフ、ガリダ、竹内 |
| 2004.5.28 | アンナプルナI峰 | 登頂(北面、無酸素) | ラルフ、ガリダ、竹内 |
| 2004.7.25 | ガッシャブルムI峰 | 登頂(無酸素) | ラルフ、ガリダ、竹内 |
| 2004.7 | ガッシャブルムII峰 | 悪天候のため登山中止 | ガリダ、竹内 |
| 2005.5.7 | シシャバンマ | 登頂(南西壁~北面、無酸素) | ラルフ、ガリダ、竹内 |
| 2005.5 | チョモランマ | 中央ロンプク氷河側~北稜、7700m地点まで、一時意識を失いパートナー達の看護のもと無事下山 | ラルフ、ガリダ、竹内 |
| 2006.5.14 | カンチェンジュンガ | 登頂(北面、無酸素) | ラルフ、ガリダ、竹内 |
| 2007.5.19 | マナスル | 登頂(北東面通常ルート、無酸素) | 国際公募隊、ラルフ |
| 2007.6~7 | ガッシャブルムII峰 | 通常ルート7000m地点で雪崩に遭い大ケガ、救出される | 国際公募隊 |
| 2008.7.8 | ガッシャブルムII峰 | 登頂(通常ルート、無酸素) | ベイカー、平出、竹内 |
| 2008.7.31 | ブロード・ピーク | 登頂(通常ルート、無酸素) | ベイカー、平出、竹内 |

山岳ガイドのラルフ・ドワイモビッツは、竹内のクライマーとしての強いモチベーションと身体能力、それと人柄を信頼している。

14座に限れば残すのは、ロイツエ、チョ・オユー、ダウラギリの3座だ。それぞれをどのルートからどんなスタイルで登るのか。これまで同様、竹内自身が楽しんでやりがいのあるユニークな方法を考え出すのではないだろうか。